

学部・研究科名生物産業学部

学部長・研究科委員長名吉田 穂積

学科名・専攻名北方圏農学科

1. 教育課程・学習成果に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	教育課程の編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。	学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。	成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。	学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。	教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 講じている ☐ 一部講じている ☐ 講じていない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☐ 行っている ☒ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	新カリキュラム実施に向けての過渡期と捉え、実験や実習の実施主体の明確化を図ると共に、新設科目実施へ向けた準備を進めている。	教員や研究室の垣根を低くする取り組みとして、学生の研究室訪問を実施している。	実験および実習について、電子ファイルによる情報共有を行うと共に、評価期間前に、評価方法についての呼びかけを行うようにしている。	問題を抱える学生について、出席状況等を含め学科会議で情報共有と対応策について意見交換する場を設けている。	都度、学科内でワーキンググループを立ち上げるなど、評価方法について検証を行うようにしている。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 生産現場や研究の最新情報を盛り込めるように配慮しながら、学生の成績評価の責任を高めることができる。	【長所】 1 年生の段階から研究室の訪問を促すことにより、3 年生からの研究室配属イメージを醸成できる。	【長所】 評価責任者、学科長、主事でファイル共有し、チェックできる体制にしている。	【長所】 学科内で情報共有することにより、実験や実習等で問題のある学生への配慮ができる	【長所】 教学・FD 委員を中心として、評価内容についての検討を行っている。
	【特色】 季節に影響される内容についても盛り込むことにより、学生に生物生産や生態系保全の考え方を促すことができる。	【特色】 各教員で企画した研究紹介企画に参加させている。	【特色】 出席簿の電子化へ向けた取り組みの実施と、再履修者への配慮ができる。	【特色】 できる限り、個々の教員が学生一人一人のイメージがしやすいように配慮できる。	【特色】 適正な評価となるよう、学科会議内において、その都度注意喚起を行っている。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 COVID-19 対応の影響もあり、後学期での詰込み型の実習となってしまった。	【問題点】 今年度は、COVID-19 禍の対応もあり、十分な研究室訪問が行えなかった。	【問題点】 紙ベースに比べ、担当者間で連続欠席者の把握がしにくい。	【問題点】 今年度の COVID-19 対応に限り、多数の情報掲示により、相談窓口の不明瞭さが出てしまった。	【問題点】 授業評価アンケートとの乖離がないか、検証することが難しい。
	【課題】 遠隔授業の対応へ向け、学科内での体制整備が急務である。	【課題】 映像資料等の整備等、入構制限下でも対応できる体制の整備が必要である。	【課題】 教員間でファイルを共有できるシステムの構築が必要である。	【課題】 学部と連携し、相談窓口の整理が必要である。。	【課題】 現在、ワーキンググループ立ち上げなど、検証を進めている段階であるため、評価が難しい。
根拠資料名			資料 1：Excel 版出欠簿のフォーマット	資料 2：成長の記録フォーマット	

2. 学生の受け入れに関する点検・評価項目

	①	②
点検項目	学生の受け入れ方針（アドミッション・ポリシー）に基づき、学生募集及び入学者選抜の制度や体制を適切に整備し、入学者選抜を公正に実施しているか。	学生の受け入れの適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☐ 行っている ☒ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	試験担当者については、学科内で協議の上決定している。また、学生募集については、過去の学生の指導実績などを勘案し、その都度修正を試みている。 推薦系の入試では、学科の評価基準を設け、担当者間の温度差が出ないように評価シートによる評価基準の統一化と点数化に努めている。	学生ごとに入試制度と GPA、指導記録などを一覧化し、検証できるようにしている。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 事前に評価基準を検討することにより、担当者間の評価の温度差を少なくすることができる。 学科の特性に合った受験生の評価をすることができる。	【長所】 入学後の評価として、成長の記録と共に検証を行う基礎資料とすることができる。
	【特色】 勉強だけでなく、キャンパスの地域特性に合った学生への配慮もできるように工夫している。	【特色】 学籍異動も含めた検索がしやすいように努めている。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 農大では多彩な入試制度を備えているが、農学全体の受験者数減少対応が必要であり、年内入試受験者の動向を早めに把握する必要がある。	【問題点】 個人情報のため、特定の PC に保存するなど、データの取り扱い方法の検証が不十分 全学共通システムで未稼働の項目もあり、学生の指導内容の確認がしにくい。
	【課題】 推薦系入試と一般試験系入試の受験者の状況解析を進める必要がある。	【課題】 電子ファイルについて、学科内の教員間で情報共有する方法が構築できていない。 全学共通の指導記録システムの早期稼働が望まれる。
根拠資料名	資料 3：令和 3 年度推薦系入試面接評価シート	個人情報を含むため、学科内での共有に留め、公開していない。

3. 教員・教員組織に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	各学部・研究科等の教員組織の編制に関する方針を明示しているか。	教員組織の編制に関する方針に基づき、教育研究活動を展開するため、適切に教員組織を編制しているか。	教員の募集、採用、昇任等を適切に行っているか。	教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。	教員組織の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☐ している ☒ 一部している ☐ していない	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☒ つなげている ☐ 一部つなげている ☐ つなげていない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	半期毎に学科の教授会により、方針について検討を行っている。 また、学科会議にてその方針を伝えるように努めている。	教員の年齢や職階について定期的に確認を行い、特に若手研究者の研究実績向上を意識した補職選定等の編成に努めている。	半期毎に職階を含めた教員構成を見直し、協議を行っている	若手研究者の研究実績および研究の資質向上に向けた取り組み（留学等）に努めている。	准教授職以下については、年1回、研究実績について報告させ、人事の配置の参考資料としている。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 半期毎に点検し、将来構想をまとめることができる。	【長所】 若手研究者が業績を向上しやすい環境となるように配慮できる。	【長所】 年齢や職階をできるだけ適正にできるように配慮できる。	【長所】 若手研究者の見聞を広めるとともに、人的ネットワークの形成ができる。	【長所】 自己評価を定期的に行うことができる。
	【特色】 特にない。	【特色】 特にない。	【特色】 年齢や職階について一覧表を作成し、検討しやすいようにしている。	【特色】 特にない。	【特色】 特にない。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 今のところ生じていない	【問題点】 個人の執務能力に依存することが多い。	【問題点】 学部の補職との整合性と、学科運営時に必要な人事構成のバランス取りが難しい。	【問題点】 研究内容も含め、個人の能力に依存することが多い。	【問題点】 研究実績と社会貢献とのバランスについて評価が難しい。
	【課題】 学部の構想との整合性をとる場合の対応が課題である。	【課題】 学部と学科の補職に適合する人材の調整が難しい。	【課題】 学部や学科の将来構想へ向けた連携が必要である。	【課題】 依命留学などの場合、所属する分野の欠員に対するフォローが難しい。	【課題】 個人の能力に依存することが多く、業績が不足する教員のフォローアップが課題である。
根拠資料名					農大の研究業績書のフォーマットを使用しているため、特に資料はない。

学部・研究科名生物産業学部

学部長・研究科委員長名吉田穂積

学科名・専攻名海洋水産学科

1. 教育課程・学習成果に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	教育課程の編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。	学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。	成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。	学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。	教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☐ している ☒ 一部している ☐ していない	☐ 講じている ☒ 一部講じている ☐ 講じていない	☐ 行っている ☒ 一部行っている ☐ 行っていない	☐ している ☒ 一部している ☐ していない	☐ 行っている ☒ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	編成できている。 しかし、教員の急逝により授業の実施が一部できていない。	講じているが、本年はコロナ禍で十分な教育ができたとは言い難い。	ほぼ行っているが、一部の科目では多面的な評価ができていないものもある。	ほぼ行っているが、一部の科目では多面的な評価ができていないものもある。	学科をあげて取り組んでいるが、コロナ禍で改善が十分とは言えない。
現状説明を踏まえた 長所・特色	【長所】 ・なし	【長所】 なし	【長所】 なし	【長所】 なし	【長所】 なし
	【特色】 ・なし	【特色】 なし	【特色】 なし	【特色】 なし	【特色】 なし
現状説明を踏まえた 問題点及び次年度への課題	【問題点】 ・教員不足	【問題点】 コロナ禍初年度でハード面、ソフト面それぞれ未完成	【問題点】 一部に多面的な評価ができていない科目がある	【問題点】 一部に多面的な評価ができていない科目がある	【問題点】 見直しが不十分
	【課題】 ・教員の確保	【課題】 オンラインでの充実した授業などの実施	【課題】 多面的な評価とシラバスの見直しなどを行い、適切に評価する	【課題】 多面的な評価とシラバスの見直しなどを行い、適切に評価する	【課題】 教員の充足を待って、あるべき教育内容のブラッシュアップ
根拠資料名					

2. 学生の受け入れに関する点検・評価項目

	①	②
点検項目	学生の受け入れ方針（アドミッション・ポリシー）に基づき、学生募集及び入学者選抜の制度や体制を適切に整備し、入学者選抜を公正に実施しているか。	学生の受け入れの適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に 対する 現状説明	制度や体制を適切に整備しており、公正に実施している。	適切性について定期的に点検・評価を行っている。今のところ問題は無し。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし
	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・農学志望者が減少しているため、入学者確保が困難になりつつある。	【問題点】 ・今後の農学志望者の減少状況
	【課題】 ・志願者の増加、入学者の増加	【課題】 ・志願者の増加
根拠資料名		

3. 教員・教員組織に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	各学部・研究科等の教員組織の編制に関する方針を明示しているか。	教員組織の編制に関する方針に基づき、教育研究活動を展開するため、適切に教員組織を編制しているか。	教員の募集、採用、昇任等を適切に行っているか。	教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。	教員組織の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☐ つなげている ☒ 一部つなげている ☐ つなげていない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	学科会議などで議論、周知している	枠取りなど必要性に応じて実施している	適切に実施している	様々なFD活動に積極的に参加して、教員個人の資質や組織の改善につなげている	教員組織の適切性について点検・評価を行い、結果を受けて改善・向上に取り組んでいる
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし
	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・昇格を望まない教員がいる	【問題点】 ・より深く実施する必要がある	【問題点】 ・教員の急逝など、予期せぬ事がある
	【課題】 ・継続	【課題】 ・継続	【課題】 ・昇格を望まない教員への対応	【課題】 ・FD活動のみならず、教員個人の資質や組織の改善に取り組む	【課題】 ・定期的に実施すると共に、アクシデントにも対応できる体制とする
根拠資料名					

学部・研究科名 生物産業学部

学部長・研究科委員長名 吉田 穂積

学科名・専攻名 食香粧化学科

1. 教育課程・学習成果に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	教育課程の編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。	学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。	成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。	学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。	教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 講じている ☐ 一部講じている ☐ 講じていない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	① 教育課程の編成・実施方針に則り、整合性に留意しつつ教育課程を組み立てている。具体的には、基礎的・基盤的知識の修得と食・香り・化粧に関わる実践的な専門科目を体系的に学ぶため、「総合教育科目」、「外国語科目」、「専門教育科目」の三つの科目区分により授業科目を配当している。 ② 教育課程編成にあたって順次性・体系的性について、カリキュラム・ポリシーとディプロマ・ポリシーの対応図を作成し、配慮に努めている。 ③ 単位認定、シラバス・チェック、欠席者のフォローアップ等については、教員間の情報交換を密に行いつつ、適宜学科会議で議論している。例えば教務課からの伝達事項を回覧し、その場で改めて確認する。あるいは評価に関する意見交換を行うなど、学科としての意思統一を図っている。（<u>学科会議資料</u>、教員ポータル等）。 ④ さらに授業内容については、各授業で到達すべき内容と項目の設定について学科カリキュラム検討委員会で実施し、学科会議を通じて各教員に配信し、これに基づくシラバスを作	1、2年生においては、カリキュラムの他に特別プログラム（<u>学科プロジェクト</u>）を準備し、希望者のみが参加できるようにすることで、学生の主体的な学びを促している。また、そのプログラムからの成果物（例えば学生ワイン）を発表することで、学生の学びへのモチベーションを刺激している。また、学科卒業生を含む一線で活躍する社会人を外部講師として活用し、新しいものの見方の教授やホンモノに触れる機会を設定している。学生コスメプロジェクトでは、ハマナス果実の免疫賦活作用を明らかにした大学院生の研究成果を化粧水に活用して商品化したのに続きクラウドファンディングを活用したハンドクリームの作成にチャレンジしている。学生アロマプロジェクトでは、学生の作った香り 2 点が国立科学博物館のミニ企画展で展示されたが、連携協定先企業のイベントにも活用され、学生のモチベーション向上に役立っている。 3 年生においては、早期の研究室配属活動およびゼミ発表を促すことで、卒業論文に関わる実質的な時間を増やしている。客員教授や民間企業の外部講師による実践的授業を設定し、実学	成績評価においては、シラバスおよび初回の授業において、評価基準を明確に提示している。また、試験後に成績質問期間を設けることで、学生からの評価に対する質問に対して答えている。 学位授与においては、学科にて卒業判定会議を開催し、厳格な判断により学位を授与している。	日頃の研究室での様々な活動時における学生・教員間による交流および、卒業論文中間発表ならびに卒業論文審査を通して、ディプロマ・ポリシーに見合う学習成果を適切に評価している。また、問題があった際には、学科会議を通して学科教員全員に周知することで、情報共有と早めの対処を行っている。	大学指定の授業評価アンケート、卒業時アンケートおよび学科が独自に準備したアンケート（6～7回目の授業で実施）等により、学生からのフィードバックを受け、その結果を学科会議や<u>学科内カリキュラム検討ワーキンググループ</u>において議論することで、改善及び向上に向けて取り組んでいる。

	成している。学生の修学・生活状況などについての共通認識を持つべく努力している（教員ポータル等） ⑤ 授業科目の位置づけに関しては、カリキュラム・ポリシーに則り、学科会議で合議により設定してきた。 ⑥ キャリア教育に関しては、特に 1 年次よりビジネスマナー講座を必修で設けると共に、特別講義並びに演習を通じて各界のトップランナーに触れ、一緒にワークを通して学ぶ機会を積極的に取り入れている（<u>演習予定表</u>）。 ⑦ 学科専門科目のカリキュラムツリーを作成し、食香粧化学概論においてツリーを提示し学習領域と科目の関係性を解説すると共に、学びとキャリアへ連関について意識付けを学生に行っている	に配慮した講義を行うと共に就職活動への意識付けを行っている。 4 年生においては、定期的な中間発表等を通して卒業論文の指導を綿密に行うことで、学生の知的好奇心を刺激している。 また、国際的な感覚を学生が涵養できるよう海外から一流の研究者を招へいし、講義できるよう申請中である。			
現状説明を踏まえた長所・特色	【長所】 ・「総合教育科目」、「専門教育科目」のいずれにおいても、自然科学から食香粧の幅広い分野を、基礎から応用に至るまで段階的に着実に学ぶことができる。	【長所】 1 年次から実習科目を多く配当し、座学と実習（体験型）を連動させることで、座学で学んだことをすぐに実習等を通して体験できるようにしている。	【長所】 なし	【長所】 丁寧な学生指導により、問題点の早期発見と対処が来ている。	【長所】 なし
	【特色】 ・1 年次から実習科目を多く配当している。特に体験的な実習は、実学への気付きとキャリアを意識した動機付けに役立つ。また 3 年次には原理を理解する実習を設定し学位課程に相応しい体系を編成している。	【特色】 1、2 年生は特別プログラム（学科プロジェクト）によって、研究室に入る前から様々な研究活動を体験できる。	【特色】 学位授与について、学科教員全員により判定（学科会議）が行われている。この結果、単位付与に際し科目責任者が独自の判断をすることを防げる。	【特色】 なし	【特色】 なし
現状説明を踏まえた問題点及び次年度への課題	【問題点】 ・なし	【問題点】 なし	【問題点】 なし	【問題点】 なし	【問題点】 業務多忙につきカリキュラム検討等の打ち合わせ時間が確保しにくい問題があるが、専任教員数の適正化が図られつつあるので解消が期待される。
	【課題】 ・学生周知の継続性。学年毎に体系周知を繰り返し定着させる必要がある。	【課題】 特別プログラムに関わる教員の負担軽減。特別プログラム参加学生の学習効	【課題】 学科 DP に照らし合わせたブレない単位付与を学科が主体となり取り組む仕組	【課題】 成績不良者増加傾向への対応。	【課題】 業務のスリム化 アンケートの継続性

		果の計測。	みの徹底の継続。		
根拠資料名	シラバス 学科会議議事録 学科パンフレット	大学ニュースリリース 学科 SNS、各プロジェクトの SNS	学科会議議事録	学科会議議事録	学科カリキュラム検討委員会議事録 学科会議議事録

2. 学生の受け入れに関する点検・評価項目

	①	②
点検項目	学生の受け入れ方針（アドミッション・ポリシー）に基づき、学生募集及び入学者選抜の制度や体制を適切に整備し、入学者選抜を公正に実施しているか。	学生の受け入れの適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	アドミッションポリシーに基づき、生物資源や地域資源を活用する食香粧化学に関心があり、社会貢献に対する強い意欲のもとで、自発的に取り組める学生を求めている。そのため、テストの得点だけで判断する一般入学試験だけでなく、面接を通して人物像を理解できる推薦試験にも力を入れており、現在は生物産業学部全体で一般推薦、指定校推薦の他に、大自然に学ぶ北海道総合型選抜、私の夢北海道総合型選抜のように多様な推薦試験を行うことで、アドミッションポリシーに合致した多様な学生を受け入れることを試みている。推薦系入試合格者には入学前教育の一環として、全員に香りキットを送付し、学科教育に関わる内容への気づきを促進している。また、学科教員全員で入試判定会議を行うことで、公平かつ客観的な入学者選抜を実施している。	幅広い入試制度により多様な学生を選抜していることから、定期的に入試制度毎の学生のGPA把握と必修科目への出席状況把握を行い、学科会議を通して学科教員に周知を図り、必要に応じ指定校の見直し等を行っている。学生の成績を含む個人データを学科 mydisc に保管し、教員が最新情報にアクセスしアップデートできる環境を整えている。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・本学科の特色である香り、化粧に興味がある学生を、多く集めることができている。	【長所】 ・指定校の定期的な見直しにより、指定校入試で入学した学生の質が向上し、一般入試入学者よりも高い成績の者が増加している。総合選抜入試にも指定校入試の評定に満たない生徒が受験者の半数を占めており、指定校制度と総合選抜との間でよい連関が出来ている。
	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・定員増以降、定員を確保出来ていない状況が2年間続いている。（定員増した分の充足が出来ていない）	【問題点】 ・なし
	【課題】 ・高校生が Web 検索で見つける以外に、学科の全国周知、広報。	【課題】 ・指定校の拡大。一般推薦で良い学生が入学した場合の指定校化検討など指定校の位置づけの再検証。
根拠資料名	学科会議議事録 入試判定会議資料（入試選考会議資料）	卒業時成績表（GPA 値）

3. 教員・教員組織に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	各学部・研究科等の教員組織の編制に関する方針を明示しているか。	教員組織の編制に関する方針に基づき、教育研究活動を展開するため、適切に教員組織を編制しているか。	教員の募集、採用、昇任等を適切に行っているか。	教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。	教員組織の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☐ している ☒ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☒ つなげている ☐ 一部つなげている ☐ つなげていない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	「設置の趣旨」に記載されている教育課程の編成の考え方及び特色に基づき、体系的に編成している。	以前は食品科学科であったため、食品を専門にする教員が多く所属していたが、現在は「食香粧化学科」の設置の趣旨に基づき、香りおよび化粧を専門とする教員の採用を積極的に行うことで対応している。 令和元年度の採用活動により若手教員 2 名を採用できたので、教育環境の改善と既存教員の負担減が期待できる。更には残り 1 枠の教員を充足させる予定。	学科専任教授会を随時開催し、募集、採用、昇任の方針について議論している。	教学 FD 委員会で話し合った内容を学科教員にフィードバックすることで、改善すべき点について共通理解を図っている。 学科独自の授業アンケートを授業 6 ～ 7 回目で実施し、その結果を速やかに学科会議でフィードバックすることにより、授業評価の透明化と改善スピードの加速化を図っている。 学会研究会等への参加を促し、最新の知識・知見の授業へのフィードバックを奨励している。	学科教授会を随時開催し、現在の組織の妥当性の評価を行うと共に、今後の方針について議論している。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・	【長所】 ・	【長所】 ・	【長所】 ・	【長所】 ・
	【特色】 ・	【特色】 ・	【特色】 ・	【特色】 ・	【特色】 ・
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・	【問題点】 ・	【問題点】 ・地理上の問題から学科に適した人材の確保が困難。	【問題点】 ・	【問題点】 ・
	【課題】 ・	【課題】 ・教員補充の継続	【課題】 ・適正ある人材の恒常的なスカウティング	【課題】 ・	【課題】 ・
根拠資料名	改組関連書類	改組関連書類	学科専任教授会議事録	学科会議議事録	学科専任教授会議事録

学部・研究科名生物産業学部

学部長・研究科委員長名吉田 穂積

学科名・専攻名自然資源経営学科

1. 教育課程・学習成果に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	教育課程の編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。	学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。	成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。	学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。	教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 講じている ☐ 一部講じている ☐ 講じていない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	学部の共通科目とともに、実学を重視した専門教育科目の体系的なカリキュラム作成を目指している。	学科の教学WGが定期的に会議を開催し、学科会議で報告し、様々な措置を講じている。 例年、学科イベントとして各ゼミナール代表による卒業論文のポスター発表会を開催している（2020年度はコロナ禍のため開催できなかった）。	成績評価は、シラバスに評価基準を明示し、定期試験等の適切な方法で習得状況を確認し適切に単位認定している。また、科目ごとに成績相談期間を設け、学生からの成績評価に関する質問に応じている。 学位授与は、学科 DP に則りゼミ及び研究室担任が中心となって適切に行っている。	研究室（ゼミナール）の教員ごと適切に行っている。 3 年～4 年次生に、前年度の卒業論文抄録集を配布し、卒論指導の一環としている。	学科の教学WGが定期的に会議を開催し、その内容を学科会議で報告し、取り組んでいる。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 基礎的科目から専門科目まで総合的・体系的な履修ができる。	【長所】 なし	【長所】 なし	【長所】 なし	【長所】 なし
	【特色】 文理融合の教育が実践できる。	【特色】 なし	【特色】 なし	【特色】 週 1 回、各学年で少人数のゼミナールを開講し、細やかに学生教育をしている。	【特色】 なし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 なし	【問題点】 なし	【問題点】 なし	【問題点】 なし	【問題点】 なし
	【課題】 なし	【課題】 なし	【課題】 なし	【課題】 なし	【課題】 なし
根拠資料名	履修のてびき・講義要項（シラバス）	学科会議資料 卒業論文ポスター	講義要項（シラバス）	卒業論文抄録集	学科会議記録

2. 学生の受け入れに関する点検・評価項目

	①	②
点検項目	学生の受け入れ方針（アドミッション・ポリシー）に基づき、学生募集及び入学者選抜の制度や体制を適切に整備し、入学者選抜を公正に実施しているか。	学生の受け入れの適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☐ 行っている ☒ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	特に推薦系の入試に際しては、アドミッション・ポリシーを踏まえた小論文や作文を出題、面接時にも「生物産業の持続的発展や自然環境との共生に関心を持ち、明確な問題意識と強い学修意欲を有している」等、主体的に学修できる人材か確認した。また、評価の基準を示した用紙を担当教員に渡し面接担当によって評価のばらつきがないように取り組んだ。	学科会議において、学生の受け入れの適切性について定期的に点検・評価を行っている。その結果を受け、改善・向上に向けた取り組みを行っている。また、本学入学センターからの依頼を機に「入学者としての要件」文言の見直しを検討している。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 複数の推薦入試において面接を実施することにより、受験者の問題意識や学修意欲、人物等を勘案した入学者選抜ができる。	【長所】 特になし
	【特色】 なし	【特色】 特になし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 なし	【問題点】 2019 年度に実施した、学科の志望動機、学習目標などを把握するためのアンケート調査を実施することができなかった。次年度の 1 年生と 2 年生を対象に実施を行ない、学生の受け入れの適切性の点検・評価および改善・向上につなげる
	【課題】 なし	【課題】 なし
根拠資料名	評価基準 各入試の募集要項（大学ホームページ）	入学者としての要件

3. 教員・教員組織に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	各学部・研究科等の教員組織の編制に関する方針を明示しているか。	教員組織の編制に関する方針に基づき、教育研究活動を展開するため、適切に教員組織を編制しているか。	教員の募集、採用、昇任等を適切に行っているか。	教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。	教員組織の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☐ つなげている ☒ 一部つなげている ☐ つなげていない	☐ 行っている ☒ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	分野及び研究室の特色を示し、学科会議等で検討をしている。 教員募集の際には学部・学科の方針を踏まえた内容を提示している。	分野・研究室の特性や教員の年齢構成・専門分野を考慮し教員配置を行っている。	教員採用は一般公募として、大学のホームページ、JREC-IN で募集情報を掲示している。 昇格等は自己申請を基本とするが、大学の定める審査基準により公正かつ厳格に実施している。	学生が回答する授業評価アンケートの結果に基づき、各教員が授業改善に取り組む。	学科の人事委員会で人事計画を立案し、これを学科会議等で確認・共有している。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 なし	【長所】 文理融合型教育の実践	【長所】 なし	【長所】 なし	【長所】 なし
	【特色】 なし	【特色】 2 分野 5 研究室体制により幅広く経営学を学ぶことができる。	【特色】 なし	【特色】 なし	【特色】 なし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 なし	【問題点】 なし	【問題点】 なし	【問題点】 なし	【問題点】 なし
	【課題】 なし	【課題】 なし	【課題】 なし	【課題】 アンケート結果の反映は、各教員の裁量に任されている。	【課題】 分野・研究室・学科全体でのチェック体制の構築。
根拠資料名	学部・学科・課程紹介 教員公募案内（ホームページ）	学部・学科・課程紹介	資格審査委員会資料	授業評価アンケート結果	学部・学科・課程紹介

学部・研究科名生物産業学部

学部長・研究科委員長名吉田 穂積

学科名・専攻名北方圏農学科

1. 教育に関する総合的事項

	①	②
目 標	■学生と教員間の交流事業 平成 29 年度に実施した 1 年次生の研究室訪問の取り組みを基盤とし、学科や研究室、教員の取り組みや研究について学生に理解を深めさせ、学生に学科のイメージの定着を図ると共に、自ら行動し学ぶ姿勢の醸成と学習意欲の向上を目指す。	■新実験・実習カリキュラムの完成年度へ向けた内容の充実 令和元年度からの学部・学科改組に基づく改正カリキュラムの運用へあたり、見直しを行った実験科目および実習科目を中心とした現行のカリキュラムの定着をはかる。
実行サイクル	4 年サイクル（平成 30 年～令和 3 年）	3 年サイクル（令和元年～3 年）
実施 スケジュール	<令和元年度> ・研究室訪問の実施方法についての検討（～4 月） ・1 年次生への周知と研究室訪問の実施（～7 月） ・1 年次生へのアンケート調査および解析（～12 月）	<令和元年度> ・新カリキュラム実施へ向けた体制の整備と実施内容の検討（～7 月） ・シラバスの作成（～12 月） ・担当教員の決定（～12 月）
目標達成を測定する指標	<令和 3 年度> ・研究室訪問出席者数 ・1 年次生への研究室訪問に関するアンケートおよび感想	<令和 3 年度> ・開講科目表およびシラバスの作成 ・授業評価アンケートによる検証
自己評価 (☑を記入)	☐ 達成した ☐ 一部達成した ☒ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	COVID-19 対応のため、入構制限により研究室訪問が十分に行えなかった。このため、ZOOM による遠隔授業スタイル（ライブ配信等）で研究室紹介を実施するなど対応を図ったが、出席した学生の掌握など、十分に行えなかった。	新カリキュラム開始を行った結果、再履修者の対応についての検討が不十分であった。このため、教員および再履修学生の認識にずれが生じることがあり、対応方法の一元化に向けた協議を続けている。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ライブ配信により、対面よりも複数の企画に参加する機会が増えると共に、録画映像を提示することにより、未参加学生への対応ができる。	【長所】 3 年次以降の研究室配属や卒論研究生かせる内容を段階的に学べる。
	【特色】 フレセミの一環として、最低 2 回以上の参加を促している。	【特色】 段階的に学びのレベルを高度化できるように 1～2 年次の実習内容を連携させるような見直しを行った。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 教員の負担の増加。	【問題点】 実験実習費の圧縮と実施日の調整。
	【課題】 未参加学生に対するフォローアップの効果検証が難しい。	【課題】 季節性の高い内容や安全確保、担当教員間の認識の統一、人数制限が必要な実習では、新カリと旧カリ学生の 実習日等の調整が必要
根拠資料名		資料 1：現実習体制の確認用資料

2. 研究に関する総合的事項

	①
目 標	■連携協定を活用した研究環境整備 連携協定を締結した農協を中心として、人材育成を考慮した試験研究の協力体制を整備する。
実行サイクル	2 年サイクル（令和元年～2 年）
実施 スケジュール	<令和元年度> ・関係機関との協議（～8 月） ・試験研究実施へ向けた具体的なプラン作成（～2 月）
目標達成を測 定する指標	<令和2 年度> ・関係機関との連携体制プランの作成
自己評価 (☑を記入)	☐ 達成した ☐ 一部達成した ☒ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	学科内だけでなく、学部横断的な連携に配慮した研究実績に取り組んでいる。 新たな取り組みとして、エミューを題材とし、国内生産組織や他大学を含めた研究協議会設立へ向けた準備を進めている
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 人的交流により研究の幅を広げることができる。 【特色】 できるだけ、わかりやすい観点で成果が出せるように努めている。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 今年度に限って、COVID-19 対応の影響によるイベント中止が相次ぎ十分な協議が行えなかった。 【課題】 ZOOM 等の活用により場所の制限はなくなっているが、より具体的な展開についての協議時期の調整が必要である。
根拠資料名	

3. その他に関する総合的事項

	①
目 標	■受験生（学生）確保に向けた取り組み オホーツクキャンパスの地域性および H30 学科名称変更と H31 カリキュラム変更を踏まえ、学部の入試活動との連携を図りながら学科の魅力づくりに取り組む。
実行サイクル	4 年サイクル（令和元年～令和4年）
実施 スケジュール	＜令和元年度＞ ・広報体制の構築とオープンキャンパス等の展示内容の検討（～5月） ・研究室や教員の取り組みについての紹介ポスターなどの作成（～7月）
目標達成を測 定する指標	＜令和4年度＞ ・オープンキャンパス参加者数およびイベント参加者へのアンケート ・毎年度の入試志願者状況
自己評価 (☑を記入)	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	学科の説明資料作成や展示内容のテーマを規格化するなど実践し、学科の紹介用パンフの作成を行った。しかし、今年度は COVID-19 対応によるイベント中止が相次ぎ、対面によるイベントの企画が相次いで中止となり、想定していた受験生対応ができなかった。イベント中止の対応策として実施された大学や学部のオンライン・イベントへの対応のため、映像コンテンツの充実を行ってきたが、機材準備が不十分であり、編集には個人的なスキルに頼るところもあり、十分な準備期間を持つことができず、対応が遅れ気味であった。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 配信用の動画準備等により、学科紹介のコンテンツが増えた。
	【特色】 開催場所の制限がなく、より広範囲に参加できる体制が構築しやすい。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 実施に体験できる機会なくなると、学部や学科の特色が伝えにくくなる。
	【課題】 オンライン・イベントの長所を生かすためのコンテンツ整備が急務である。
根拠資料名	資料2：学科紹介パンフレット原稿

学部・研究科名生物産業学部

学部長・研究科委員長名吉田 穂積

学科名・専攻名海洋水産学科

1. 教育に関する総合的事項

	①
目 標	■教育カリキュラムの深化 今後予定される新たな教育カリキュラムの編成に向けて、特に1・2年次にとって魅力のある学科専門分野と学部横断型の学びに重点を置いたカリキュラムを策定する。
実行サイクル	3 年サイクル（平成31年～令和3年）
実施 スケジュール	＜令和2年度＞ ・1 研究室3名体制の完成に伴う学科カリキュラムの充実（～3月） ・学科内での問題意識の擦り合わせ、具体的方針の策定（～8月） ・大学及び学部のカリキュラム編成方針を踏まえ、FD 委員会を中心に学科専門カリキュラムと学科としてあるべき学部横断型のカリキュラム内容の検討（～2月）
目標達成を測 定する指標	＜令和2年度＞ ・基礎実験・臨海実習および海洋水産体験実習のメニューの改訂 ・あるべき学科専門カリキュラムと学部横断型カリキュラムについて問題意識をすりあわせる
自己評価 (☑を記入)	☐ 達成した ☐ 一部達成した ☒ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	本年度はコロナ禍及び学科教員の逝去により、全く機能しなかった。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 なし
	【特色】 なし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 最終年度に実施予定
	【課題】 最終年度に実施する
根拠資料名	

2. 研究に関する総合的事項

	①
目 標	■地域のニーズに則した研究活動の実施 10年を経過した海洋水産学科では、学科の専門性を活かし、網走市、オホーツク圏、北海道、さらにつながりを持つ海域・地域におけるニーズに応えるべく、教員・研究室それぞれの研究活動の幅を広げ、内容を深化させる。その研究成果を学科の学生教育及び地域・社会等に広く還元する。
実行サイクル	__2__年サイクル（令和2年～令和3年）
実施 スケジュール	＜令和2年度＞ ・現在までの具体的取組内容の整理、今後の可能性についての検討（～3月）
目標達成を測 定する指標	＜令和2年度＞ ・地域との共同研究の現状把握、課題の抽出 ・共同研究の開始状況
自己評価 (☑を記入)	☐ 達成した ☐ 一部達成した ☒ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	コロナ禍で他機関との意見交換などが、その機会も得られなかった。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 なし
	【特色】 なし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 最終年度に実施する
	【課題】 最終年度に実施予定
根拠資料名	

3. その他に関する総合的事項

	①
目 標	■受験生（学生）確保に向けた取り組み オホーツクキャンパスの地域性及び今後予定されるカリキュラム変更を踏まえ、ディプロマポリシーに沿った高い目的意識を持つ受験生を確保するため、大学・学部全体による広報・募集活動に加えて、積極的な取り組みを展開する。
実行サイクル	__3__年サイクル（令和元年～令和3年）
実施 スケジュール	＜令和2年度＞ ・指定校の検討（～5月） ・学科教員の合意による方針の策定（～10月） ・機会を捉えた積極的な情報発信（随時）
目標達成を測 定する指標	＜令和元年度＞ ・現行実施の広報関係企画の評価作成、課題の抽出 ・令和2年度入試志願者状況
自己評価 (☑を記入)	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	指定校の再検討を行った。 学科会議において、入試対策について教員間の合意を図った。 情報発信は、コロナ禍に伴い十分とは言えない。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 コロナ禍においても、定員確保が図れた。
	【特色】 指定校の選定が適正であると考えられる。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 本年は昨年までの貯金があり、なんとか機能したが、次年度は本年度の分も広報活動に力を注ぐ必要がある。
	【課題】 指定校の充実、広報活動の充実。
根拠資料名	

学部・研究科名生物産業学部

学部長・研究科委員長名吉田 穂積

学科名・専攻名食香粧化学科

1. 教育に関する総合的事項

	①	②	③
目 標	■新教育カリキュラムの設定 学部・学科のアドミッションポリシーに基づく新しい教育カリキュラムへの改正に向けて、学部共通の学科横断的体験型プログラム等を踏まえ、その中で、天然資源および食品や香粧品素材の性質や製造原理など基礎から応用まで総合的な学びに重点を置いた学科の特色・専門性をより活かせる学科専門カリキュラムを策定する。	■学科プロジェクトの推進とヒカル学生の創出 1年生、2年生に向けた「食・香・粧」領域を取り扱う学科のプロジェクトを設定し、有志学生を募り、研究活動のフックとなるような気付きを涵養する。モチベーションの高い学生のニーズに応えるプロジェクト設定により、学生のやる気の継続と充実感の向上を図る。キャンパス見学会や収穫祭、SNS等のチャネルによる成果発表により、学生保護者や受験者にも訴求する好循環を形成する。 地域に貢献する学生を創出する。	
実行サイクル	2 年サイクル（令和 1 年～令和 2 年）	2 年サイクル（令和 1 年～令和 2 年）	年サイクル（平成 年～ 年）
実施 スケジュール	・シラバス連携調査と新任教員2名採用に伴う科目担当者のWGでの再編 令和2年1月 ・新カリキュラムの検証 令和2年12月 ・新カリキュラムの学科専門科目策定 令和3年9月 ・学部共通科目の策定 令和3年11月	・学科プロジェクトの設定と募集（4月） ・プロジェクトの開始（4月～随時）	
目標達成を測定する指標	＜令和2年度＞ ・シラバス掲載の科目担当者	＜令和2年度＞ ・熊谷喜八道場（9月～）、学生ワインプロジェクト（10月～）、学生アロマプロジェクト（R2 1月～）のみの開始に留まった。各プロジェクトのSNSが指標。 ・学生ワイン2019年ビンテージの販売（10月）	
自己評価 （☑を記入）	☐ 達成した ☐ 一部達成した ☒ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☐ 一部達成した ☒ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に対する 現状説明	コロナ禍における遠隔授業、ソーシャルディスタンスに配慮した新しい対面授業への対応の為、新カリキュラムの検証・立案に対して殆ど対応することが出来なかった。	前期は学生が大学入構禁止につき麦の播種が出来ず、学生ビールプロジェクトを中止した。学生コスメプロジェクトについては、2年生チームのクラウドファンディング対応が進まず、1年生チームの募集が出来なかった。	
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・日本で唯一の食、香り、化粧を学べるカリキュラムである	【長所】 ・学生ワインプロジェクトに関わった学生には、製品化までに製造団体との実習や講義を重ねたため、製品化のプロセスを学べた。 ・商品の現物は何よりも説得力があることから広報にも役立つ。	【長所】 ・
	【特色】 ・実習科目について、低学年では体験型内容を高学年では原理や操作の習熟を目標としたシラバス構成とし、学びの興味を抱かせ、年次が	【特色】 ・北海道の生物資源や研究成果を活用した「ものづくり」を食・香・粧の各領域でアピールすることが出来る。	【特色】 ・

2020（令和2）年度 包括的な点検・評価報告書

様式2

	進むに従い興味の探求を深化させるシラバス構成を目指している。	・学生のモチベーション向上と共に地域の課題解決を図ることができる。 ・学生の実習に対する意識づけに役立つ。 ・必修科目を複数落としているとエントリーできないので成績向上が期待できる。 ・時間割の空白を補完することができる。	
現状説明を踏まえた問題点及び次年度への課題	【問題点】 ・	【問題点】 ・参加学生が必ずしも全員が参加している訳ではない。 ・担当する教員の負担が非常に大きい。	【問題点】 ・
	【課題】 ・金曜日を共通科目実施日として設定し実験実習を行った結果、曜日によって3限始まりに出来ない時間割の問題が課題 ・化粧品、香料の関連科目設定（食品重視からの移行）	【課題】 ・・参加しない学生の篩い分け方法、タイミングを考える。 ・教員負担軽減の方策 ・麦やホップ栽培での北方圏農学科、寒冷地農場の協力体制構築	【課題】 ・
根拠資料名	・学科実験実習スケジュール ・学科会議議事録	・SNS ・プレスリリース ・新聞記事	

2. 研究に関する総合的事項

	①	②	③
目 標	■連携協定や共同研究等を活用した研究プロジェクトの実施と国際化 学科の専門性を活かした食品、香料および化粧品をテーマとする連携研究プロジェクトを関連企業あるいは研究機関と企画・実施するとともに、この研究成果を学科の学生教育及び地域・社会等に広く還元する。 共同研究の対象を海外研究機関に広げ、研究の推進と国際交流を促進する。		
実行サイクル	____3____年サイクル（令和 1 年～令和 3 年）	____年サイクル（平成 ____ 年～ ____ 年）	____年サイクル（平成 ____ 年～ ____ 年）
実施 スケジュール	＜令和2年度＞ ・取り組み内容の検討（～6月） ・連携研究プロジェクトの策定（～8月） ・		
目標達成を測定する指標	＜令和2年度＞ ・プロジェクトの策定数 ・プロジェクト参画教員数 ・関連する外部資金への応募・獲得状況		
自己評価 （☑を記入）	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更

目標に対する現状説明	コロナ禍のため企業も在宅勤務が多く、交流機会が激減した。 その中で以下のプロジェクトが設定された。 ＊ポッカサッポロ・日本海産ホタテ稚貝の有効利用・山崎 ＊コーケンフーズ&フレイバー(株)、ホタテ加工副産物の素材化・山崎 ＊オホーツク農協連合・オホーツク産大豆の高付加価値化・山崎 ＊(株)マルキチ・ホタテ加工自動化に関する装置開発・山崎 ＊（株）DHC ・プラセンタの機能性に関する研究・丹羽 ＊ 和弘食品（株）自然な出汁香るエキスを創出に関する研究・妙田 ＊湧永製薬（株）熟成ニンニク抽出液のにおいに関する研究・妙田 ＊サッポロビール（株）ビールテイスト飲料における Polaris 香気の効果に関する研究・妙田 ＊サントリーグローバルイノベーションセンター（株）飲料等複雑味特性評価方法、分析方法に関する研究・妙田 ＊アルビオン（株）・北見工業大学 脳波測定技術を用いた化粧品の効果測定に関する研究・妙田 ＊アルビオン（株）スリランカにおける化粧品原料および伝統的な薬草に関する研究・妙田、宮下 ＊北見工大分析センター NMR 検出感度の検討 のじま ＊北見工大服部先生 セスキテルペンの構造解析 のじま ＊物産フードサイエンス、東京農工大 オリゴ糖の機能性 遠藤 ＊タカナシ乳業 乳酸菌・ビフィズス菌の機能性 遠藤 ＊トゥルク大学（フィンランド）、アストゥリアス乳生品研究所（スペイン） 腸内細菌と健康 遠藤 ＊国立遺伝学研究所 乳酸菌・ビフィズス菌のゲノム解析 遠藤 ＊平塚製菓 国産カカオの発酵に関する研究 遠藤 ＊サントリー ウィスキー乳酸菌の環境適応 遠藤 ＊アピ ミツバチ乳酸菌の利用 遠藤		
現状説明を踏まえた長所・特色	【長所】 ・原料生産に近接しているため、生物資源を食、香、粧の領域に幅広く展開出来る強みがある	【長所】 ・	【長所】 ・
	【特色】 ・研究室間連携により効率的かつ効果的なアプローチができる	【特色】 ・	【特色】 ・
現状説明を踏まえた問題点及び次年度への課題	【問題点】 ・	【問題点】 ・	【問題点】 ・
	【課題】 ・研究室横断的な課題の設定 ・成果を社会実装に繋げる	【課題】 ・	【課題】 ・
根拠資料名	共同研究契約書 委託研究契約 寄付金		

3. その他に関する総合的事項

	①	②	③
目 標	■受験生（学生）確保に向けた取り組み オホーツクキャンパスの地域性及び H30 学科名称変更・H31 カリキュラム変更を踏まえ、多元的評価による高い志や目的意識を持った受験生を確保するために、大学・学部全体による広報・募集活動に加えて、学科独自の取り組みとして以下の広報・募集活動を実施する。 ・学科の強みを伸ばすための新入生に対する精緻なデータ収集（入学判断など）と解析 ・SNS を活用した広報活動（学生を巻き込んだ学科の優れた特色の配信） ・効果的・効率的高校訪問（学科に対する関心の高い高 1、2 年生所属高校へのアプローチと理科部教員への接続） ・入試センターとの緊密な連携による受験生動向の把握		
実行サイクル	____ 2 ____ 年サイクル（令和 1 年～ 令和 2 年）	_____ 年サイクル（平成 ____ 年～ ____ 年）	_____ 年サイクル（平成 ____ 年～ ____ 年）
実施 スケジュール	<令和2年度> ・担任面談による新入生のプロファイリング（4 月） ・SNS 発信 随時 ・繋がりがある高校進路指導教員への働きかけ（6 月） ・出張講義 随時		
目標達成を測定する指標	<令和2年度> ・学生の成長の記録内容（志望動機、キャリアへの考え） ・入試志願者状況 ・学科特色あるプロジェクトへのエントリー数		
自己評価 (☑を記入)	☐ 達成した ☐ 一部達成した ☒ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	コロナ禍につき、推薦系進路決定時期に高校にアクセスが出来なかった。指定校、総合選抜（旧 AO）の志願者数が前年比で増加した。		
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・	【長所】 ・	【長所】 ・
	【特色】 ・	【特色】 ・	【特色】 ・
現状説明を 踏まえた	【問題点】 ・一般入試では定員を満たすことが出来なかった	【問題点】 ・	【問題点】 ・

問題点及び次 年度への課題	【課題】 ・年内入試での受験生確保	【課題】 ・	【課題】 ・
根拠資料名	パンフレット 出張講義報告 入試結果 SNS		

学部・研究科名生物産業学部

学部長・研究科委員長名吉田 穂積

学科名・専攻名自然資源経営学科

1. 教育に関する総合的事項

	①
目 標	■教育カリキュラムの改善に向けた検討 2019 年度のカリキュラム改正による教育研究活動の実施状況と効果を検証し、次期のカリキュラム改正に向け、学科のカリキュラムポリシーを実現しうる設置すべき科目について検討する。また、実学を重視した学科の特色・専門性を活かせる魅力的なフィールドワークや体験重視のプログラムを検討する。
実行サイクル	3 年サイクル（2020 年～2022 年）
実施 スケジュール	
目標達成を測 定する指標	
自己評価 (☑を記入)	☐ 達成した ☐ 一部達成した ☒ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	・コロナ禍のため、すべてのフィールドワークや体験重視のプログラムを実施できなかったため、実施状況と効果を検証することができなかった。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】
	【特色】
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】
	【課題】
根拠資料名	

2. 研究に関する総合的事項

	①
目 標	■地域創生・地域振興にかかわる研究プロジェクトの実施 研究室および教員の知財の活用、また他学科研究室との連携、そして東京農業大学・生物産業学部が締結した産官学金労による多様な包括連携協定なども活用し、地域創生・地域振興に資する研究プロジェクトを企画・実施する。また、この研究成果を学科の学生教育及び地域・社会等に広く還元する。
実行サイクル	__3__ 年サイクル（2020 年～2022 年）
実施 スケジュール	1）福島イノベーション・コースト構想推進事業（福島県浪江町）（2020 年 10 月、12 月） 2）茨城県阿見町： 3）茨城県行方市： 4）農業女子プロジェクト： 5）学部長主導型プロジェクト（2020 年通して）
目標達成を測 定する指標	・実施した実績
自己評価 (☑を記入)	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	1）本学科の教員 2 名、学生 6 名が参加して、浪江町復興支援事業「稲刈り実習・ドローン講習会」に参加した。本学科の教員 3 名、学生 8 名が参加して、浪江町復興支援事業「浪江復興米販売実習・復興講座」に参加した（12 月）。 2）本学科の教員 1 名が、農業振興計画の策定に参画した（「阿見町農業振興計画に関する調査業務」 3）本学科の教員 1 名が、「令和 2 年度行方市 6 次産業化シンポジウム」の運営に参画した 4）本学科の教員教員 1 名が企画に参画し、北海道北見市留辺蘂町で各分野のクリエイターとコラボレーションしたファッションショーを開催した。 5）本学科の教員教員 2 名が（本キャンパス学科横断型）プロジェクト「地域主体のアザラシの循環型順応的管理システムの構築を目指して～アザラシの生態系サービスと有効利用の可能性を探る～」に参画している。2 月に本年度の研究報告会を行った。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 全般的に、本学科所属教員の専門性を活かし地方創生に貢献できる。
	【特色】 全般的に、学生が参加できるような体制になっている。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 全般的に、学生がプロジェクトに参加する際、通常講義への出席とプロジェクト参加のスケジュール調整が難しい
	【課題】 多くの学生が参加できる体制を整える
根拠資料名	1）出張申請書と事業プログラム 2）阿見町との打ち合わせ資料「阿見町農業振興計画」 3）令和 2 年度行方市 6 次産業化シンポジウム実施要項 4）るべしべ魅力あるまちづくり協議会_企画書 5）研究報告会プログラム

3. その他に関する総合的事項

	①
目 標	■受験生（学生）確保に向けた取り組み ディプロマポリシーに沿った高い目的意識を持つ受験生を確保するために、大学・学部全体による広報・募集活動に加えて、学科独自の取り組みとして学科の教育研究の魅力を受験生に限らず広く社会に情報発信する広報活動を実施する。
実行サイクル	3 年サイクル（2020 年～2022 年）
実施 スケジュール	1）学科の研究教育を紹介する動画の作成（2020 年 7 月） 2）大阪府大阪高等学校との高大接続事業の取り組み（2020 年度を通して）：
目標達成を測定する指標	1）動画視聴回数 2）受験者数
自己評価 （☑を記入）	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に対する 現状説明	1）学科の研究教育を紹介する動画の作成し、Web オープンキャンパスで参加者に視聴してもらった。また、大学ホームページに掲載し、自由に視聴できる環境を整えた。 2）オンラインでの模擬講義の実施を行ないながら事業構想を練り、数回にわたる高校での現地打合せをおこない、次年度以降の事業実施の枠組みを策定した。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 1）動画を配信することで、時間的空間的な制約なしに学科の学びの魅力を知ってもらうことができる 2）高校の教員との積極的なコミュニケーションによって、高校生に対して学科の学びの魅力をより訴求できる活動になっている
	【特色】 1）在籍する学生も登場してもらい、リアリティーのある学科の学びを紹介している 2）大阪高校だけでなく、その関係する周辺高校に対しても事業内容が発信されている
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 広報活動全般として、学生目線での学科の教育研究の魅力をより一層発信すること
	【課題】 広報活動全般として、情報発信の適切な方法を検討すること
根拠資料名	1）大学ホームページでの視聴回数（2020/10/13 配信、2021/03/23 現在 1,825 回視聴） 2）出張報告書